
眠る林檎

伊東 聖子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠る林檎

【Nコード】

N2160G

【作者名】

伊東 聖子

【あらすじ】

つぐみは掃除の天才。たくと暮らす家を機嫌よく切り盛りする。たくはそんなつぐみを愛する一方で、もうちよつとゆるやかに過ごしたい・・・と願う。ある日、たくは意を決して、「ガッンと言ってやる！」さて、どうなることやら・・・？

白く細かいタイルを、一面に貼りめぐらせたバスルームはつぼみの気に入りで

この家を建ててからというもの、日に二度は必ず湯船にお湯を張り、薄桃色の入浴剤でやわらいだお湯に浸かるようになった。

その都度、丁寧に掃除もする。目地にカビが生えるのは許さない… つぐみは神経質に、タイルの水滴を拭き取った。

夫のたくは、つぐみは掃除の天才だと言う。

結婚して四年、新婚当事に暮らしていた社宅のマンションでも、二年前に新築したこの家でも

たくは未だに埃ひとつ、髪の毛一本見たことがなかった。

朝は、真っ白な皿にトースト、フルーツ、卵料理などをきちんと並べ、熱々のほうじ茶なんかを

絶妙のタイミングで用意するし、たくが起きて来る頃にはもう洗濯も干し終えていて、機嫌よく

鼻歌なんか歌いながら、庭のグリーンに水を撒いたりしている。

それは、日曜日でも、祝日でも、変わることなく、だからと言って機械的なわけでもない。

つぐみはあたたかな妻だった。

「なぜ、朝はほうじ茶なの？」

たくはかなり気を遣いながらつぐみに尋ねる。

「だって、珈琲は身体を冷やすのよ。朝はあったかいほうじ茶を飲まなくっちゃ！」

つぐみは、当然でしょと言う風に、真顔で返した。

自宅を出るのは毎朝七時二十分。それを少しでも過ぎるとつぐみはそわそわする。

本当は、四十五分でも充分間に合うのだが、もし電車が遅れた時のために…、

もしバスが来なかった時のために…

つぐみは譲らなかった。

毎朝、三十分近く予定を早められるたくは、バスに乗らずに駅まで歩いていくこともあれば

駅の珈琲ショップで、ゆっくり新聞を読みながら、好きな珈琲を飲むこともあった。

結婚して四年。つぐみは専業主婦として家庭に入り、申し分なく家を守ってくれている。

それに対して、たくは何の不満もないはずなのだが、今朝はどうも違和感を感じないではいられなかった。

というのも、本当はもうちょっと家にいて、出勤するまでの時間を楽しみたいし、見たいニュースだってある。それに、珈琲だって本当は家で飲みたいのだ。つぐみが淹れてくれる珈琲を…

「よし。」

たくは、思い切ってつぐみにこのことを話すことに決めた。主は俺だ。ガツンと言ってやる！

その日たくは、同僚と居酒屋で飲んでから帰ると、つぐみに電話を入れた。

つぐみは相変わらず機嫌よく、はいはいとのんきな返事をする。

「お茶漬けでもつくって待ってるね。」

そんな気が利く一言も、今日のたくにはなんだか鬱陶しく感じられた。

「先に寝てろよ。何時に帰れるか分らないんだから。」
思いがけずきつい言い方になる。

一瞬の沈黙の後、つぐみが言う。

「何言ってるの？飲んだ後は、アルコールで身体の水分が蒸発しやすいのよ？」

ちゃんと、塩分と水分の多いものを食べないと！先に寝てて言うのなら、

自分でラーメンでも食べてきてよね！まったくもう！」

たくは笑い出しそうになった。つぐみにあっちゃかなわないのだ。そこが好きで結婚を決めたし、今でもつぐみのそういうところが愛しかった。

たくは、はいはいと笑いながら答え、こう付け足した。

「じゃあ高菜のお茶漬けでお願いします。」

「いやよ。もう作る気なくしちゃったもん。林檎でも置いておくから、

自分でむいて食べたなら？」
ガチャリ。

つぐみが受話器を置く時には、お互い笑っていた。

帰るときつと、きちんと皮をむき、塩水に浸かった数切れの林檎が、冷蔵庫に眠っているはずだ。

（後書き）

夫婦にしか分らない、二人の間に流れる空気というものが
あると思います。

二人の決め事、二人の常識。相手に良かれと思ってすること、でも
なかなか通じないこと。

あ、これって幸せなんだって気づく瞬間を大切に・・・
夫婦という人間関係を築いていけたらいいなと、書きながら思いま
した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2160g/>

眠る林檎

2011年1月12日21時49分発行